

1. さらに変わっていく十勝の川

地域産業
環境

としべつがわ かわいしんすいる 利別川・川合新水路

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

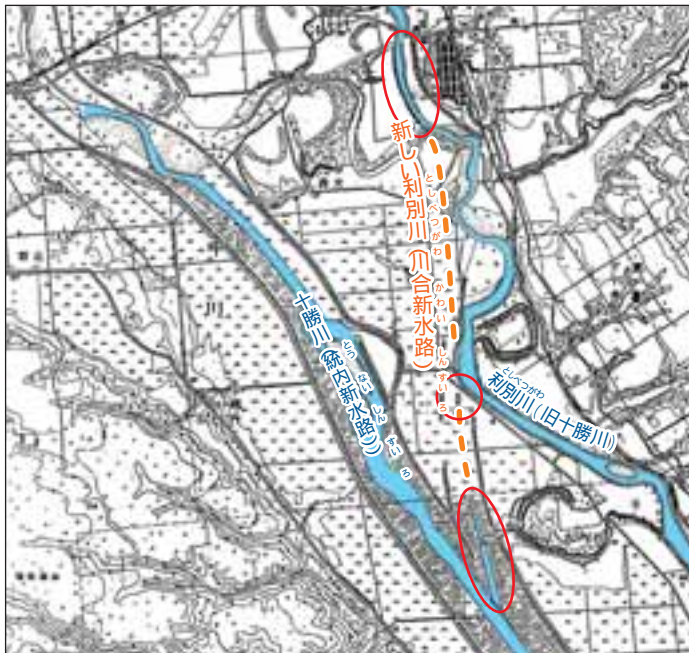
第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん



昭和12年(1937)、十勝川下流部にほられた15kmの新水路(統内新水路)が新しい十勝川となりました。そのため、利別太(池田町)から茂岩(豊頃町)までの旧十勝川は、利別川となりました。(p190)

しかし、工事はこれで終わりではありません。利別川でも、統内新水路に直接つながる新水路(川合新水路)をつくることで流れをスムーズにし、利別川ぞいの開拓地や街を洪水から守ろうというのです。

工事は、統内新水路に続いて始まりました。しかし、昭和18年(1943)、戦争が激しくなったことによって、工事は中断されました。(p197)

昭和21年(1946)発行の地形図。利別川の新水路が、ところどころ(○)ほられているが、ほとんどつながっていない。(国土地理院所蔵の1/5万地形図〔十勝池田〕を使用、50%に縮小・着色)



(上) エクスケーターによってほられていく新しい利別川(川合新水路)。



(右) エクスケーターを見学する池田町民。

少しずつ再開される川の工事

昭和20年(1945)、戦争は終わりましたが、日本中が混乱し、すぐには川の工事を再開することができません。

しかし、戦後の混乱から立ち直っていく中で、川の工事も少しずつ再開されていきます。

昭和24年(1949)には札内川の工事が本格的に始まり、十勝川下流の堤防や統内新水路の仕上げ工事も始まります。

そして昭和25年(1950)、ついに利別川の新水路(川合新水路)の工事が再開されました。

工事は、機関車とエクスケーターという機械によって進められ、ほった土によって堤防もつくられていきます。

新水路の完成と「もぐり橋」

新水路によって、川合地区と粒刈石地区が分けられてしまいます。そこで、新水路には橋もかけられます。

この「川合橋」は、堤防と堤防をつなぐのではなく、河川敷に下りた道を結ぶものでした。そのため、河川敷にかぶるほど川の水が増えると、橋全体が水にしずむので「もぐり橋」とも呼ばれることとなります。

水路ができ橋も完成した昭和31年(1956)、川合新水路に水が流れ、利別川の下流部は、今とほとんど同じ流れになりました。



川合橋。水が増えると「もぐる」。



(このページの写真: 『十勝川写真で綴る変遷』より)

1 利別川ぞい(としべつがわぞい):今、利別川ぞいにある町は、下流から、池田町、本別町、足寄町、陸別町。

2 粗朶(そだ): 細い木の枝を集めてたばにしたもの。土や川岸がくずれることや川底がけずられことを防いだり、土にうめて、水ぬきの地下水路(暗渠: あんきょ)をつくったりするために使われる。

かつての十勝川は「旧利別川」に

利別川は、統内新水路に流れこむようになりましたが、旧十勝川ともつながったままでした。そこで、引き続き、旧十勝川とのつながりをふさぐ（しめ切る）工事がおこなわれました。

この工事では、川の力を使って岸をつくりました。旧十勝川に向かう分かれ道のところで、枝をからめた「粗朶」というものを川底にしずめ、太いくいを川底にたくさん打ちます（並杭）。

すると、川の流れがこの場所でゆるやかになり、運ばれていた土砂がしずみ、たまります。こうして川がだんだんと岸をつくっていくのです（こういう仕組みを「水制」といいます： p212）。

ある程度川岸ができたところで、人間が仕上げをし、堤防をつくってしめ切り工事は完成しました。

このようにして、池田市街と茂岩市街をつなぎ、かつてはさかんに川舟が行き来していた旧十勝川は、水の量が減り、旧利別川となりました。



粗朶をしき、並杭の水制をつくったところ。

（写真：『十勝川写真で綴る変遷』より）



旧利別川と新しい利別川のつながりをしめ切ったところ。（国土地理院刊行の1/5万地形図（十勝池田）を使用）



新しい利別川（川合新水路）は、新しい十勝川（統内新水路）に合流している。（平成17年（2005）撮影）

もう少し細かいこと

しゅんせつ船もかつやく

新水路工事では、水路に水が流れてからも、「しゅんせつ」がおこなわれます。川のしゅんせつというのは、水路の土砂をほり取って深く広くして、水の流れをよくすることです。（p211）

ポンプの力で水中のドロをほり取る「しゅんせつ船」という船が活やくしました。

しゅんせつして出た土砂は、旧利別川のしめ切りなどに利用されました。

その後も長年、もつと水の流れをよくするために、十勝川下流などでしゅんせつがおこなわれてきました。

昭和28年（1953）から13年間働いた、しゅんせつ船「十勝号」。



「もぐり橋」から川合大橋へ

水にもぐると、川合橋には上流から流されてきた流木やゴミが引っかかります。また、冬には橋の上面に氷が張ることがありますが、川合橋には欄干（手すり）がないので、登下校をする子どもたちが川に落ちる危険があります。

そんな時は、近くに住む人たちが集まって取りのぞき、きれいにしました。地元の人たちの努力によって、橋の安全が保たれ、事故が防がれていたのです。

昭和52年（1977）、新しく「川合大橋」がかけられました。堤防と堤防の間をつなぎ、手すりもついた大きな橋です。

もぐり橋は、この橋の完成にともなわなくなりました。しかし、のちに、歌の歌詞としてよみがえることとなります。

（ p231 ）



洪水のあと、もぐり橋をきれいにする地元の人たち。

（写真：『十勝川写真で綴る変遷』より）

3 水制（すいせい）：岸を守り、岸から流れを遠ざける方法。流れの中に流れにくいもの（大型のコンクリートブロックやくいなど）を置くことで、その場所の流れをおさえ、川岸がけずられるのを防ぎ、川が運ぶ土砂（どしゃ）をためる。（ p212 ）

4 しゅんせつ（浚渫）：川の底や海の底の土砂（どしゃ）を掘削（くっさく）すること。一般に水面から下の掘削をしゅんせつという。河道、航路、港の水深を保つため、または環境保全（かんきょうほぜん）や浄化（じょうか）のために行われる。（ p211 ）